慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初級レベルの授業報告：基幹コース3科目を担当して
Sub Title	
Author	中村, 愛(Nakamura, Ai)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2016
Jtitle	日本語と日本語教育 No.44 (2016. 3) ,p.85- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20160300-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』44：85-101（2016.3）

初級レベルの授業報告

―基幹コース 3 科目を担当して―

中　村　　愛

1.　はじめに

本稿は、2015 年春学期、秋学期の「基幹コース」の科目のうち、筆者が担当した 3 科目（「応用会話 2」、「表記法 2」、「文章講読 2」）について科目別に報告する。

2.　コースとレベルの概要

慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター別科・日本語研修課程では、「基幹コース」と「特化コース」が設けられており、受講者は各自目的によってコースの選択を行う。「基幹コース」とは、日本語科目と日本文化科目の中から、受講者の日本語能力や感心に合うものを自由に選択できるコースであり、更に「技能別科目」・「総合科目」・「日本文化科目」の 3 つの科目群に分かれている。一方、「特化コース」とは、決められた科目編成の中で学習するコースである。本稿で報告する「応用会話 2」、「表記法 2」「文章講読 2」は「基幹コース」の「技能別科目」の中に設置されている科目である。

受講者のレベルは、まず、学期の初めに別科・日本語研修課程全体で行われる「学習段階分けテスト」の結果よって 9 段階に分けられる。「基幹コース」科目も 9 段階にレベルが分かれており、学生が同コースの履修を希望する場合、クラス毎に、初回の授業でレベルチェックテストを受け、その合否によって履修の可否が決定する。9 段階のうち、1 から 4 までが

初級レベルであり、本稿で報告する 3 科目のレベルは、いずれも 2 レベルである。

3. 「応用会話 2」

以下に「応用会話 2」の授業の概要を述べ、実践報告を行う。

3.1 「応用会話 2」のシラバス

授業は週 1 回 2 コマ（1 コマ 90 分）、15 週である。春学期と秋学期のシラバスは、基本的に同じものを使用した。表 1 は秋学期のシラバスである。

表 1 「応用会話 2」シラバス

Objectives	The aim of this course is to ensure students to master elementary level basic conversation. They will also develop speech techniques using basic vocabulary and grammar through various activities. Taking these subjects together with Comprehensive Japanese 2 is strongly recommended for the most effective learning.
Contents	The course is designed for students to enhance their speaking and listening ability using sentence structures and grammatical patterns learned in *Minna no Nihongo Shokyuu I* (L1−L25).
Textbooks	*Minna no Nihongo Shokyuu I Main Textbook 2nd Edition* (3A Corporation) *Minna no Nihongo Shokyuu I Translation and Grammatical Notes-English 2nd Edition* (3A Corporation)
Assessment	Attendance, final exam, small tests, homework, and class participation

3.2 「応用会話 2」の到達目標

この授業の到達目標は、初級の基本的な語彙や文型を用いて会話ができるようになることである。ここで述べる「初級」とは、具体的には 2.「基幹コースの概要」で述べた 9 段階のレベルのうち 1 と 2 を指しており、この科目を修了した時点で、2 レベルまでに学習した語彙や文型を正しく用いて会話ができるようになることを目標とした。

3.3 「応用会話 2」の教材

教材は『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』と『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説英語版』を指定教材とし、第 1 課から第 25 課までの語彙と文法を用いた会話練習を行った。基本的に、1 回（90 分、2 コマ）の授業で 2 課ずつ進むため、受講者は 2 課分の語彙や文型を理解した上で、それらを会話の中で運用する練習を行う。しかし、コースの性質上、受講者の中には文法のクラスを選択していないことも想定されるため、毎回、語彙や文型の導入が必要となる。そこで、授業時間を有効に活用する目的により、指定教材で該当課の学習項目を予習し、授業中は筆者作成教材を中心に教室活動を進めた。筆者作成教材については、後の授業内容で詳しく述べる。

3.4 「応用会話 2」の評価方法

成績の評価方法は、試験（期末試験、小テスト）30%、宿題 30%、授業態度（出席率、授業中の課題）40%とし、総合点が 100 点から 90 点までは A、89 点から 80 点までは B、79 点から 60 点までは C、59 点以下は D（不合格）とした。

試験は期末試験と小テストを行った。期末試験は、授業で学習した会話表現を用いた会話試験を実施した。試験は、教師と受講者が一対一で会話を行い、①語彙・文型、②発音、③聞き取り、④話すスピードについて評価を行った。小テストは、前回の授業で学習した会話表現のディクテーションテストを毎回、授業の最後に行った。

宿題は、筆者作成教材で学習した会話スクリプトと同じ形式で、スクリプトの部分を一部空欄にしたものを配布し、空欄に学習したスクリプトを記入して提出するものであった。これは授業で学習した会話表現の復習を目的としているため、基本的には授業中に使用した表現と同じものを記入することにしたが、チャレンジを試みたい学生には、同じものを書いた上で、更に、新たなスクリプトを考えて書いても良いことにした。

授業中の課題は、会話練習の最後に、その回で学んだ会話表現を用いた会話を受講者が二人一組となって行うもので、評価は期末試験と同じ4つの項目（①語彙・文型、②発音、③聞き取り、④話すスピード）について評価を行った。

3.5 「応用会話2」の受講者

2015年春学期、秋学期の受講者について、人数と学期の初めに行う「学習段階分けテスト」のレベル別の内訳を表2に示す。

表2 「応用会話2」受講者数とレベルの内訳

	2015年春学期	2015年秋学期
受講者数	10名	13名
レベル：人数	1レベル：6名 2レベル：4名	1レベル：7名 2レベル：5名 3レベル：1名

両学期ともに1レベルの学生が2レベルの学生を若干上回っていた。秋学期は、別科・日本語研修課程全体で行われる「学習段階分けテスト」で3レベルであった学生が1名受講していた。聞き取り調査の結果、本人は上のレベルの科目の受講を希望していたが、科目ごとに行われる初回のレベルチェックテストに不合格であったため、本科目を履修したとのことであった。授業中の活動や試験の結果、ほかの学生と特に大きな差は見られず、会話における日本語のレベルは2レベルが妥当であったと思われる。

3.6 「応用会話2」の授業内容

全15回の授業予定を表3に示す。表3は2015年春学期の予定である。秋学期についても、基本的には大きな変更はなく授業を行った。

表3 「応用会話2」予定表

回	授業内容
1	個別学習指導期間
2	レベルチェックテスト、ガイダンス、L1

3	L2・L3
4	L4・L5
5	L6・L7
6	L8・L9
7	L10・L11
8	L12・L13
9	L1～L13 復習
10	L14・L15
11	L16・L17
12	L18・L19
13	L20・L21
14	L22・L23
15	L24・L25、まとめ、期末試験

3.7 「応用会話 2」の授業方法

授業の進め方や学習内容について、3 回目の授業を例に挙げ、具体的に述べる。学習項目は『みんなの日本語初級 I 本冊』第 2 課と第 3 課の語彙、文型を使用した会話表現である。授業で扱った学習文型については、『みんなの日本語初級 I 本冊』「学習項目一覧」(p231) より例文を一部抜粋し、以下に示す。

〔第 2 課の学習文型〕

①「これは　つくえです」

②「それは　ボールペンですか、シャープペンシルですか」

③「これは　くるまの　ほんです」

④「あれは　わたしの　かばんです」

⑤「あれは　わたしのです」

⑥「この　てちょうは　わたしのです」

〔第 3 課の学習文型〕

①「ここは　きょうしつです」

②「うけつけは　ここです」

③「これは　にほんの　くるまです」

④「この　ネクタイは　1,500 えんです」

学習文型は 2 課合わせて 10 あるが、限られた授業時間内に、文型毎に導入および会話練習を行うことは不可能であるため、筆者作成教材に沿って授業を進めた。同教材は、学習文型や語彙を用いた 3 つのモデル会話に分けて練習し、最終的にそれら 3 つの会話を全て繋げ、長い会話に発展練習できるよう作成したものである。授業は【1】から【7】の流れで進めた。

【1】モデル会話 1 のディクテーション

【2】モデル会話 1 で用いられた語彙・文型を会話表現として導入

【3】【2】の会話表現をペアで練習

【4】モデル会話 1 を暗記、ペアで練習

【5】モデル会話 1 を発表

（※モデル会話 2、3 につても【1】から【5】の順で同様に進める）

【6】まとめの会話（モデル会話 1＋2＋3）をペアで練習、発表

【7】小テスト（前回の会話表現のディクテーションテスト）

3.8 「応用会話 2」の授業報告

別科・日本語研修課程の受講生は、秋学期に来日し、秋学期から春学期に継続して 1 年間在学する学生が多く、秋学期よりも春学期の学生のほうが日本語のレベルが高かった。

授業の運営については、学習語彙や文型を会話表現として導入した後で会話練習を行ったが、基本的に文型を応用させた会話練習が活動の中心であるため、語彙や文型の知識が積み上がっていない学生の場合、授業が進むにつれ、活動についてくることが困難になった。先に紹介したシラバスの通り、履修希望者には文法クラスの履修を事前に強く勧めたが、受講者

の中には文法の授業を履修していない学生もいた。その場合、文法の授業を履修している学生に比べ、語彙量がなかなか増えず、後半になっても正確な文型を用いて話すことが困難な様子が多く見られた。

到達目標の達成については概ね達成できたが、日本語学習歴が全くない学生については、文法の授業を履修していた場合でも、2 課ごとのスピードに着いてくることはなかなか難しかった。段階的な学習の視点から、まず、1 課ずつ進む「会話 1」や「会話 2」のようなクラスで文型の運用練習をしっかり行った上で、「応用会話 2」にチャレンジすることが望ましいと思われる。来学期も引き続き、履修希望者には、文法の授業の履修を積極的に進めたい。また、途中でクラスのスピードについてこられない学生がいたことから、初回のレベルチェックテストの内容についても見直し、適切な履修指導が行えるよう考えたいと思う。

4. 「表記法 2」

以下に「表記法 2」の授業の概要を述べ、実践報告を行う。

4.1 「表記法 2」のシラバス

授業は週 1 回、1 コマ 90 分、15 週である。春学期と秋学期のシラバスは、基本的に同じものを使用した。表 4 は秋学期のシラバスである。

表 4 「表記法 2」シラバス

Objectives	This course is designed for students to master elementary kanji. Students will acquire the basic knowledge of kanji and will be able to read and write necessary kanji for each level.
Contents	The course is designed for students who have already learned approximately 100 elementary kanji. The course aims to aid students in reading and writing of further 100 elementary kanji (Unit 11–Unit 20 in the textbook) and associated vocabulary.
Textbooks	Minna no Nihongo Shokyuu I Kanji 2nd Edition-English Edition (3A Corporation)
Assessment	Attendance, final exam, small tests, homework, and class participation.

4.2 「表記法 2」の到達目標

この授業の到達目標は、初級レベルの漢字の読み書きを正確に覚え、それらの運用能力を身につけることである。この授業における「初級レベルの漢字」とは、『みんなの日本語初級 I 漢字英語版』のユニット 11 からユニット 20 までの漢字を指す。

4.3 「表記法 2」の教材

教材は『みんなの日本語初級 I 漢字英語版』を指定教材とし、ユニット 11 からユニット 20 までの漢字の導入、練習を行った。1 ユニットあたりの学習漢字の数は、ユニットによって多少異なるが、平均 10 程度であり、読み換え漢字も含めるとかなりの量になる。限られた授業時間で効率的に練習を行うために、授業では筆者作成教材を中心に進め、指定教材は主に復習に使用した。筆者作成教材については、後の授業内容で詳しく述べる。

4.4 「表記法 2」の評価方法

成績の評価方法は、試験（期末試験、小テスト）30%、宿題 30%、授業態度（出席率、授業中の課題）40%とし、総合点が 100 点から 90 点までは A、89 点から 80 点までは B、79 点から 60 点までは C、59 点以下は D（不合格）とした。

試験は期末試験と小テストを実施した。期末試験は、ユニット 11 からユニット 20 で学習した漢字の読み書きについて行った。小テストは、毎回、授業の初めに、前回の授業で学習した漢字の読み書きについてテストを行った。

宿題は、筆者作成教材の練習問題から一部抜粋し、授業の復習ができるようにした。また、授業で学習したことを繰り返し練習し、習得することを目的に、小テストの問題は宿題の中から出題した。

授業中の課題は、漢字の導入と基本練習を終えた後、教材の最後にある練習問題をその日の総復習として行った。

4.5 「表記法 2」の受講者

2015 年春学期、秋学期の受講者について、人数と学期の初めに行う「学習段階分けテスト」のレベル別の内訳を表 5 に示す。

表 5 「表記法 2」受講者数とレベルの内訳

	2015 年春学期	2015 年秋学期
受講者数	5 名	12 名
レベル：人数	2 レベル：4 名 3 レベル：1 名	2 レベル：10 名 3 レベル：2 名

「応用会話 2」と同じく、春学期と秋学期を比較すると、秋学期よりも春学期の学生のほうが日本語のレベルがやや高く、漢字の読み書きについても、同様であった。2 レベルの科目でありながら、両学期ともに 3 レベルの履修者もいた。聞き取り調査の結果、レベルチェックテストの結果によって 3 レベル以上の授業が履修できなかったため、このクラスを履修したとのことであった。受講者は総じて漢字に対する関心が高く、授業への取り組み方を見ても、最後まで高いモチベーションを維持していた。

4.6 「表記法 2」の授業内容

全 15 回の授業予定を表 6 に示す。表 6 は 2015 年春学期の予定である。秋学期についても、基本的には大きな変更はなく授業を行った。

表 6 「表記法 2」予定表

回	授業内容
1	個別学習指導期間
2	レベルチェックテスト、ガイダンス、U10 までの復習
3	U11
4	U12
5	U13
6	U14
7	U15

8	U11～U15 復習
9	U16
10	U17
11	U18
12	U19
13	U20
14	U16～U20 復習
15	全体のまとめ、期末試験

4.7 「表記法 2」の授業方法

授業の進め方や学習内容について、1 回目の授業を例に挙げ、具体的に述べる。学習課は『みんなの日本語初級 I 漢字英語版』のユニット 11 である。

授業は筆者作成教材に沿って進めた。同教材は、受講者が考えながら漢字の読み方と書き方の知識を学び、運用練習が行えるよう、練習問題を解きながら学習する形式で作成した。授業の流れについて、教材の問題を例に挙げながら示す。

学習項目:「教」、「習」

【1】 読み方の導入

（　　）　　（　　）

教えます　／　**習**います

先生(せんせい)は日本語(にほんご)を**おしえます**。　学生(がくせい)は日本語(にほんご)を**ならいます**。

（　　）　　（　　）

漢字は単語単位で導入した。また、「教える」と「習う」のように意味的に関連があるものを一緒に導入するなどして、漢字や単語の意味にも意識が向くよう教材を作成した。教師は「教えます」と「習います」の上に平仮名で読み方を書くよう指示し、学生は送り仮名から類推したり、下の例文

をヒントに答え書き込んだ。

【2】 書き方の導入

教師が漢字の筆順を示しながら板書し、字形など学習者が間違い易いポイントについて例を示しながら注意を促した。教師が例を示した後、受講者は各自ノートに 3 回ずつ書いて練習した。その際、必ず単語で書くように促し、受講者のノートをチェックしながら書き方の指導を行った。

【3】 書く練習

受講者は平仮名の下線の下の空欄に漢字を記入した。教師は受講者のノートをチェックしながら個別に書き方の指導を行った。早く書けた学生に答えを板書してもらい、全体で答え合わせを行った。

【4】 読む練習

例文を読んで、先に導入した読み方の確認練習を行った。

【5】 読み換え漢字の練習

受講者は既習漢字の知識を使って練習問題を解きながら新しい読み方を学習した。答え合わせは全体で読み合わせをしながら行った。

学習項目：「日」、「月」、「金」

＜練習問題＞
何曜日(なんようび)ですか。
日曜日(ようび)　月曜日(ようび)　火曜日(かようび)　水曜日(すいようび)　木曜日(もくようび)　金曜日(きんようび)　土曜日(どようび)

【6】 復習：その日の学習漢字の復習問題

下線の漢字の下に平仮名で読み方を、下線の平仮名の下に漢字で答えを書き込んだ。

わたしは日曜日、うちで一日ねました。ぜんぜんべんきょうしませんでした。

【7】 読み方の復習

指定教材の例文の振り仮名を消したものを全体で音読した。これはその

日の授業の復習用であり、受講者に達成感を感じてもらう目的で設けたため、時間に余裕がない場合は、自宅学習で使用した。

4.8 「表記法 2」の授業報告

授業の運営は筆者作成教材に沿って問題なく進めることができた。開講当初は、ノートに漢字を書く練習の際、単語ではなく、漢字単体で書く学生が多く見受けられたが、運用力を身につけるために、漢字の意味を意識して単語単位で覚えるよう繰り返し促すことで徐々に改善が見られた。受講者の多くは漢字や日本語への関心が高く、教室での活動に意欲的であり、週 1 回の授業ではあったが、宿題と指定教材を使用した自宅学習にもよく取り組んでいた。そのため、多くの学生が到達目標を達成できた。ただし、秋学期の三田祭後の授業では、漢字を書くスピードが全体的に落ち、練習問題に時間がかかった。休みの間、漢字や日本語を書いたり、読んだりする機会が著しく減ったことが要因ではないかと考えられる。また、文法や読解の授業と並行して受講していた学生は、練習問題を解くスピードが徐々に速くなり、正答率も高かった。

5. 「文章講読 2」

以下に「文章講読 2」の授業の概要を述べ、実践報告を行う。

5.1 「文章講読 2」のシラバス

授業は週 1 回、1 コマ 90 分、15 週である。春学期と秋学期のシラバスは、基本的に同じものを使用した。表 7 は秋学期のシラバスである。

表 7 「文章講読 2」シラバス

Objectives	The course will enable students to acquire reading comprehension skills for simple elementary sentences. Materials used in class will assist the students in progressively understanding kanji, vocabulary, and grammar. Students will be able to understand reading materials as a coherent paragraph.

Contents	The course is designed for students to enhance their reading comprehension skills based on sentence structures and grammatical patterns learned in Minna no Nihongo Shokyuu I (L14−L25).
Textbooks	Minna no Nihongo Shokyuu Edition Shokyuu de Yomeru Topikku 25 (3A Corporation)
Assessment	Attendance, final exam, small tests, homework, and class participation.

5.2 「文章講読 2」の到達目標

この授業の到達目標は、①初級レベルの平易な文章の読解能力を身に付けること、②文型・語彙・漢字を理解し、一まとまりの内容が読み取れるようにすることである。具体的には『みんなの日本語初級 I 本冊』第 14 課から第 25 課までの語彙や文型を理解し、まとまった短い文章が読めるようにすることを目標とした。

5.3 「文章講読 2」の教材

教材は『みんなの日本語初級 I 初級で読めるトピック 25 第 2 版』を指定教材とした。授業では 2 レベル相当の語彙、文型に合わせ、同教科書の第 14 課から第 25 課までの本文を一部リライトしたものや筆者が作成した本文および問題によって進めた。指定教材は主に復習用として自宅学習に使用した。

5.4 「文章講読 2」の評価方法

成績の評価方法は、試験（期末試験、小テスト）30%、宿題 30%、授業態度（出席率、授業中の課題）40%とし、総合点が 100 点から 90 点までは A、89 点から 80 点までは B、79 点から 60 点までは C、59 点以下は D（不合格）とした。

試験は期末試験と小テストを実施した。期末試験は授業で学習した文章から 1 題と筆者が新たに作成した文章 1 題を出題した。小テストは、毎回、授業の最後に、前回の授業で学習した本文の中から短文ディクテーションを行った。

宿題は、春学期と秋学期で学生のレベルを考慮し、内容を変更した。春学期は受講者が 3 名で、比較的よく読めていたため、応用練習として、教科書の問題を復習も兼ねて使用した。秋学期は、日本語のまとまった文を読むことにまだ慣れていない学生が多かったため、正しい日本語の文章を書き写すことで、語彙や文型を意識し、ある程度まとまった文に慣れることを目的に宿題の内容を変更した。

授業中の課題は、読解に必要な語彙や文型を使用した様々な活動を設けた。

5.5 「文章講読 2」の受講者

2015 年春学期、秋学期の受講者について、人数と学期の初めに行う「学習段階分けテスト」のレベル別の内訳を表 8 に示す。

表 8 「文章講読 2」受講者数とレベルの内訳

	2015 年春学期	2015 年秋学期
受講者数	3 名	11 名
レベル：人数	1 レベル：1 名 2 レベル：2 名	2 レベル：7 名 3 レベル：4 名

春学期と秋学期を比較すると、春学期の学生のほうが日本語のレベルがやや高く、1 レベルの受講者も日本語学習に大変意欲的であった。一方、秋学期には 3 レベルの受講者が 4 名いたが、全体的に日本語の文を読んだり、書いたりすることに不慣れな学生が多く見受けられた。

5.6 「文章講読 2」の授業内容

全 15 回の授業予定を表 9 に示す。表 9 は 2015 年春学期の予定である。秋学期についても、基本的には大きな変更はなく授業を行った。

表 9 「文章講読 2」予定表

回	授業内容
1	個別学習指導期間
2	レベルチェックテスト、ガイダンス、L11～L13 の復習

3	L14
4	L15
5	L16
6	L17
7	L18
8	L19
9	L20
10	L21
11	L22
12	L23
13	L24
14	L25
15	全体のまとめ、期末試験

5.7 「文章講読 2」の授業方法

授業は筆者作成教材に沿って進めた。主な授業の流れを【1】から【8】に示す。課によっては【1】を本文読解後に行った。

【1】 本文の読解に必要な文型の導入

【2】 問題文の読み合わせ

【3】 本文と問題

【4】 本文の読み合わせ（1 人 1 文ずつ音読）

【5】 問題の答え合わせ

【6】 問題用紙を見ずに【5】と同じ問題の口答質問

【7】 本文の音読（※時間に余裕があるときのみ）

【8】 小テスト（前回の本文の短文ディクテーション）

5.8 「文章講読 2」の授業報告

春学期は、受講者 3 名中 2 名が 2 レベルの文法クラスも並行して履修していた。そのため、文型導入の時間を短縮することができ、その分、読解

の活動や発展練習により多くの時間を費やすことができた。試験や課題の結果からも、到達目標が達成できたと言える。一方、秋学期は、文章読解に時間がかかり、発展的な練習や活動を行う時間はあまりなかった。特に前半は、全体的に日本語の文を読むことにまだ慣れていない受講者が多かった。また、後半は、春学期に比べ、読解にかかる時間に個人差が見られるようになり、問題の正答率にもばらつきが見られた。そこで、問題の形式を記述問題から正誤問題に変更したり、学習文型が含まれる文に絞って内容理解を深める活動を行うなど、教室活動の内容を一部変更しながら授業運営を行った。秋学期についても、レベルに個人差はあったが、全員、到達目標が達成できた。

6. おわりに

今回、授業報告を行った「応用会話 2」、「表記法 2」、「文章講読 2」の 3 科目において、いずれも基本的な文法知識の必要性を強く感じた。特に、「応用会話 2」は、語彙と文型の積み上げがない学生は、少し長い発話になると途端に文の構造の崩れや助詞の間違いが目立ち、単純な会話においてもコミュニケーションに支障を来していた。また、「文章講読 2」では、まとまりのある文章の読解となると、内容の理解が困難になり、語彙や漢字の知識がある場合でも、それらのみで推測して読んでしまい、内容を大きく読み違えてしまうケースも見られた。また、「表記法 2」では、単語単位で漢字を読んだり書いたりすることはできるが、自由に文を作ろうとすると、文の構造や助詞の間違いに加え、活用の変換ができないために、送り仮名の間違いが目立っていた。このことから、「基幹コース」の初級の「技能別科目」について、文法科目を並行して履修することの重要性を改めて感じた。今後は、履修の組み合わせが学習にもたらす効果や影響について更に考察を深め、履修指導に役立てたい。

謝辞

就任初年度の授業運営にあたり、村田年先生にご指導を賜りました。謹んで御礼を申し上げます。授業全般に関わる責任の所在につきましては、当然のことながら、筆者にあることをお断りいたします。

使用教科書

『みんなの日本語初級Ⅰ本冊　第2版』スリーエーネットワーク編著（2012）スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅰ漢字　英語版　第2版』西口光一監修、新矢麻紀子・古賀千世子・高田亨・御子神慶子編著（2014）スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅰ初級で読めるトピック25　第2版』牧野昭子・澤田幸子・重川明美・田中よね・水野マリ子著（2014）スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説　英語版　第2版』スリーエーネットワーク編著（2012）スリーエーネットワーク

参考文献

加納千恵子・清水百合・谷部弘子著（2015）『BASIC KANJI BOOK1 新版』凡人社

加納千恵子・清水百合・谷部弘子著（2015）『BASIC KANJI BOOK2 新版』凡人社

坂野永理・池田庸子著（2011）『初級日本語げんきⅡ　第2版』ジャパンタイムズ

坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子著（2011）『初級日本語げんきⅠ　第2版』ジャパンタイムズ

スリーエーネットワーク編著（2000）『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク編著（2012）『みんなの日本語初級Ⅰ標準問題集　第2版』スリーエーネットワーク

西口光一著（2007）『3級編　例文で学ぶ漢字と言葉』スリーエーネットワーク

姫野昌子・村田年・伊東祐郎・藤森弘子著（2005）『日本語中級からのスキルバランスワークブック』凡人社

平井悦子・三輪さち子著（2012）『みんなの日本語初級Ⅰ書いて覚える文型練習帳　第2版』スリーエーネットワーク

牧野昭子・沢田幸子・重川明美・田中よね・水野マリ子著（2000）『みんなの日本語初級Ⅰ初級で読めるトピック25』スリーエーネットワーク

水谷信子著（1993）『教室を楽しくする初級日本語スキット集』ジャパンタイムズ